

令和4年度(2022年度) 自己評価結果公表

社会福祉法人ふじみ野会

子どものその幼保連携型認定こども園

1, 本園の教育・保育目標

子どものその保育生活協同組合から 50 年余り積み重ねてきた保育実践をもとに、一人ひとりの子どもを大切に、自然のなかで友だちと感動を共有してあそび、子どもたちが人とつながり生きる力を育てることを念頭に保育実践を行う。

平成 27 年 4 月から幼稚園機能と保育園機能を併せ持つ幼保連携型認定こども園として一体的な教育・保育を行う。

【私たちの願い(教育保育理念)】

豊かな自然	自然の中でのびのびと子どもを育てます
あたたかな人間関係	おとなの愛情と仲間の中で子どもを育てます
本物の文化やあそび	豊かな文化やあそびの中で子どもを育てます
地域とともに	園と家庭・地域が一緒になって子どもを育てます

【私たちのめざす子ども像(教育保育目標)】

- ◎友だちと思いっきりあそび、自分の気持ちを素直に表現でき、人とつながって生きていく子ども
- ◎何にでも興味・関心を持ち、自分でやってみようとする子ども
- ◎失敗を恐れずに挑戦し、仲間とともに学び、その経験を生かす子ども
- ◎あそびの中でからだを動かす楽しさがわかる子ども
- ◎生活習慣を身につけ、健康な生活ができる子ども

2, 本年度、重点的に取り組む目標・計画

【重点目標】

- ◎幼保連携の特色を生かした保育・教育内容の構築に努める。

乳児期はあたたかい人間関係の中で安心して過ごし、自我の芽生えを大切にする。

幼児期は、大人の愛情を受け、自然の中で仲間と交わりのびのび遊ぶ中で自己肯定感を育てる。

- ◎幼児中心の子育て支援の取り組み(うさぎの広場)だけでなく、乳児を中心とした子育て支援(赤ちゃんのつどい) プレ保育の残り組を始め、地域の未就園児のその保護者を支えていく。

- ◎新型コロナウイルスの感染対策をしっかりと行いながら、園児の安全と、通常の日常生活、行事を出来る限り行えるようにする。

3. 評価項目の取り組み状況

評価項目	取 組 み 状 況
教育・保育内容について	乳児担当の職員はチームワーク良く子どもたちの日々の成長を丁寧にみていった。0歳児クラスでは、少しずつ園児が増えていき6月には、定員9名の園児が埋まった。その中で、高月齢の子が1～3月生まれの低月齢の子に気持ちを寄せていく姿と子ども同士の気持ちの交流があり、乳児期の友だちとのかかわりやつながりの芽生えを実感した。 乳児に職員が給食を食べる口の動きを見せたいが、感染対策の為、マスクをしている。その為に、給食の時だけでも透明マスクをして、子ども達に、食べる時の口の動きを見せるなどの取り組みを行ってきた。 幼児期の子どもたちは、今年度も、新型コロナウイルスの影響で、行事を中止にしたり、1学期には学級閉鎖になったクラスもあったが、それでも、前年度よりは園の行事が出来る事も増え、昨年まで開催出来なかった保護者を呼んでの行事も行う事が出来た。参観等も以前のような形で行うようにもなり、少しずつ元の生活に戻るようになってきている。 日常生活は、3学期には、ほぼ以前のような生活を送れるようになった。3学期の年長組は、ドッジボールやドロケイなど、夢中になって遊んでおり、お手紙ごっこやひな祭りの制作なども以前と遜色なく取り組んでいる。他の年度の子どもの様子を見ても、コロナ前と変わらず、同じように成長している。 安心した園生活を送る中で、自分の気持ちを周りの大人やクラスの友だちに受け止めてもらい、自己肯定感を土台に意欲的に活動する姿を実感した。 例年行っている異年齢の交流も出来るようになり、お互いに交流をする事で、年長組へのあこがれの気持ちや小さい子どもへの優しい気持ちが育ってきている。やがて遊びの中で培った総合的な力を学びの力につなげていくことを意識しつつも、急がずじっくりと育てることをこころがけた。 コロナ禍の中での保育は3年を経過し、少しずつ、緩和をされてきているが、それでも感染状況等をつねに考え、昨年までの経験をもとに、どのように行って行くべきか？をつねに模索しながら過ごした一年だった。そして、出来る事、出来ない事の判断に迷いながらそれでも『子ども達の為に・・・』という思いだけは忘れずに出来る事を探しながら保育を行ってきた。

教育・保育内容の保護者への周知	毎月、各クラスや各年度で作るカリキュラムで、子どもの姿やその月に取り組む全体的な保育内容を伝えている。さらに日々のクラスや子どもの活動の様子をクラス新聞で伝えてきた。 昨年は中止になる事があったクラス会を年間通して行い、保護者の悩みを聞いたりするなど直接話す事が出来た。また、夏祭り、親子その祭り等、保護者を呼んでの行事をする事が出来た事で、子どもへの関わり方や園の保育について理解してもらうきっかけになった。
給食と食育	多様な食物アレルギーに対応する中、ヒヤリとする場面を無くするためアレルギーカードを記入式に変えて4年目になった。給食室側と保育側の双方が記入し互いにチェックすることでミスは大きく減ったが、それでも数回のミスがあり、その都度、職員でミスが起きた原因や今後の対応策について話し合ってきた。毎月給食委員会を開き保育現場との意見を交流し、メニューの改善も行った。 旬の食材の枝豆やトウモロコシなどの皮むきなどを、感染対策を行いながら、クラス単位で体験させることが出来た。また、コロナで出来なかった給食当番なども行うようになった。 年長組は、自分たちで野菜を育て、収穫し、野菜が出来るまでの過程を知るなど食育の取り組みも行った。また、今年度は他の年度でも野菜栽培に取り組むクラスがあった。
教職員同士の協力・連携	幼保連携を進めるため今年度も幼児クラスは幼稚部・保育部の担任が合同で話し合う年度別会議をできるだけ週1回行うようにした。その中でそれぞれの子どもの配慮する場面や幼保一緒に保育する場面など、認定こども園ならではの特徴と留意すべき点を話し合い、互いの理解を深めていった。若い職員にとって、年度別会議は少人数で自分の悩みを出しやすくアドバイスをもらえる機会であり、色々な事を学べたという声が多くあった。 乳児クラスでも、複数担任なので、週1回はクラス会議を行う事で、保育内容の確認や週の見通しなどの話し合いを重ねてきた。 職員数の多い認定こども園なので、保育現場だけでなく、給食室、事務所、バスなどの運行管理にかかわるさまざまな職員の意見が反映できるように、合同年度担当会議や、行事の事務局会議などを開くようにした。 「新型コロナウイルス」も3年目になり、ある程度のノウハウは出来てきたが、それでも、感染者数の変動により、昨年と同じ対応が出来ない事も多く、その都度、子どもたちの日常をできるだけ守ろうと職員で話し合いを重ねた。

研修・研究の充実	新型コロナウイルスの影響で外部研修は難しかったが、それでも昨年よりは外部研修を行う事が出来た。それぞれが、学んだことを日々の保育に生かしている。また、中堅職員を中心としたキャリアアップ研修では、マネジメントや保護者支援などで各園の情報に触れ、新たな学びとなっている。 また、今年度は、身体の発達を促す部会、散歩部会、折り紙部会と昨年とは違う部会を行い、1年間を通して保育の質を上げる取り組みを行った。 食物アレルギーの子どもが増えている現実がある。職員会議などで、アレルギーの多様性を管理栄養士から学ぶ取り組みを行った。
健康・安全・衛生管理への配慮	健康・衛生管理面では、昨年同様「新型コロナウイルス」の感染により、手洗い、うがい、クロウズアップされ、うがいと手を洗う習慣の徹底を図った。また、日々の生活でも、登園した時、バスに乗車する前、給食の前には手指の消毒をしてきた。給食ではパーティションをし、テーブルの数を増やして同じテーブルで食べる子の人数を減らした。職員は、子どもとの距離を取って給食を食べて、子ども達がおかわりにくる度にマスクを着用していた。 子どもが触るところ（トイレ、ドア、テーブル、ロッカー、おもちゃ、バスの中等）は毎日消毒をし、感染拡大を少しでも抑えようと努力してきた。1学期に、新型コロナウイルスの感染拡大の為に学級閉鎖になったクラスが1クラスのみあったが、それ以降、新型コロナウイルスの影響で学級閉鎖にならなかったのは、日々の感染対策が大きかったのではないかなと思う。半面、今年度は、インフルエンザが流行し、幼稚部では学級閉鎖になったクラスもあった。 園児のマスクについては緩和をし、幼稚部は、バスの中、遅バス保育、オレンジ組が部屋で過ごす時、保育部は、朝、夕の合同保育の時等、複数クラスと一緒に過ごす場面のみマスクの着用をして来た。3月13日からは、国の方針に従い、すべての場面でのマスク着用を促さない事にした。ただ、不安のある保護者もいるのではないかなという事で、保護者にマスク着用をして欲しい場面を聞き、個別対応でマスクの着用をしてきた。職員、保護者についても、マスクを着用していたが、3月13日からは、個人の判断に委ねるようにした。 防犯対策として、不審者訓練を年数回行った。内線電話を各クラスから出来るようにし、何か起きたとしても、すぐに連絡が取れるようになった。また、不審者が来た場合の対応策について考えてきた。昨年度から夕方に、駐車場から園までの間に男性職員を配置

	し、防犯対策を強化してきたが、途中からは時間を決めて、2回の園外の見回りをするやり方に変更をした。
保護者・地域との連携と支援	昨年度は、初めてプレ保育を行った。(親子プレは、2歳児の親子で決まった曜日に子どものそのに来てもらい、月に2～3回一緒に遊んだり、制作をしたり、自然に触れたりしながら給食も親子で食べてもらう取り組みである。)地域子育て支援事業としての「うさぎの広場」「赤ちゃんのつどい」も昨年度同様に行ってきた。 子育てが初めてのお母さんたちの悩みを聞いて助言をしたり、赤ちゃんの接し方やあそびを体験してもらう取り組みである。 今年度も、新型コロナウイルスの影響で、人数制限で、感染対策をしながらの開催だったが、その中で、回数を重ねるごとに親同士、あるいは親と職員が気軽に話し合える場になった。 令和元年4月から幼稚部の各地域班から運営委員を選出し、幼稚部保護者による運営委員会が始まった。これは、前身の保育生協が大事にしてきた保護者の活動・交流・保育や行事への積極的な参加を認定こども園が引き継ぎ、さらなる発展を目指す組織である。 今年度からは、保育部の保護者からも、運営委員を選出してもらい、名称も「子どものその運営サポート委員」に変更し、幼稚部、保育部の垣根を越えて、子ども達の為に取り組む事になった。 今年度の「お父さんとあそぼう山登り」は、開催日が猛暑予報だったため直前に中止となった。(猛暑による中止は2回目で、今後は秋に変更する予定である。)夏のキャンプは新型コロナウイルスの流行もあり開催出来なかったが、その変わりに10月に秋のキャンプを開催した。川あそびやキャンプファイヤーなどは行わなかったが、その分ゆっくりとした時間が流れ、本来のキャンプの姿で楽しむ事が出来た。1月の「お父さんと遊ぼう冬のあそび」は3年ぶりに開催し、親子で凧あげやコマ大会を楽しんだ。 メリーの会(卒園生活動委員会)主催の行事は、人形劇サークルのお母さんたちの力を借りて、6月に「人形をつくろう」11月にも「山登り」を開催した。卒園した子ども達が久しぶりに友だちと再会できて喜んでいた。 運営サポート委員のお父さん達がとても積極的で、今まで当たり前に行っていた取り組みを再度見直し、新しい取り組みを行った。 ホームページは園を広く知ってもらい地域の方とつながる大切なツールなので、今年度も、更新をできるだけ行うようにした。「赤ちゃんのつどい」や「うさぎの広場」の情報、園の見学会などのお知らせも載せるように心がけた。また、インスタグラムを新たに始

	めた。こまめに更新をしていった。 今年度は、昨年に比べ、感染対策をしながらではあったが、「夏まつり」「親子そのまつり」絵本の外部講師を呼んでの「ひだまり講演会」を3年ぶりに保護者を呼んで開催する事が出来た。夏まつりでは、職員が遊びの広場で輪投げやボーリング、ヨーヨーパンチ等を行ったり、駄菓子子ども達にあげたりして、親子で楽しんだ。また、園庭には小さいやぐらを建て「カッパのまつり」を先生と楽しそうに踊っていた。親子そのまつりは、密を避ける為、年少、年中、年長組と別れて時間を決めての開催となったが、親子で伝承あそびを楽しめた。ひだまり講演会には、たくさんの保護者が参加して、絵本の大切さを学ぶ事が出来た。 2学期の運動会は、年長組、年中組、年少組と分散して行った。12月の人形劇は各クラス時間をずらして行った。その他の作品展、節分、クラス会、年長の合宿、山登り、保育参観など、令和4年度は、ほぼ以前のような形で行う事が出来た。
--	---

4、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
幼保連携型認定こども園としての教育・保育の推進	乳児クラスが2階にあるため、乳児の日常の姿が伝わりにくい面がある。乳児の安定した生活を守りつつ、幼児クラスとの交流をいろいろな場面で広げていく。 また、幼児の年度別会議はほぼ週1回行っているが、乳児のクラス会議は不定期だったので、定期的に開けるように会議中の見守り体制を整え、日常の保育の振り返りを大切にしていく。
教職員の資質向上	子ども理解を深めるために、広い視野を持ち、さらに積極的に研修研究活動に取り組めるようにしていきたい。新型コロナウイルスが5類になるので、外部研修や講師を招いての研修も取り組んでいきたい。 園内研修の内容が固定化されつつあるので、視野を広げ充実を図る。 年間個人目標を全職員に書いてもらい、半年、一年ごとに、自分の目標に対して振り返ってもらいながら、保育の質を高める取り組みを行っていく。
子育て支援の取り組みの充実	専任の職員を配置し、「うさぎの広場」「赤ちゃんのつどい」の内容をリフレッシュして、子育てを楽しめる雰囲気を作っていく。 また、プレ保育を火曜日、木曜日、金曜日クラスで行い、未就

	園児とその保護者の支援をより積極的に行っていく。 保護者同士の交流、仲間づくりを目指し、地域に開かれた園として取り組む。
食育の推進	職員室の職員に、乳児クラスだけでなく幼児クラスの子どもの給食時間の様子を時々見に来てもらい、メニューや食材の話をしてもらい、食への興味関心を広げる。 子ども達に、枝豆やそら豆をむいでもらうのを手伝ってもらったり、給食の時に、竹の子を見たり触ったりしながら、本物の素材に触れる機会を増やす。 年長組は、なすやきゅうり、ミニトマトなどの野菜栽培を行う事で、野菜が育つ過程を学んでいく。
保護者参加	昨年同様、「子どものその運営サポート委員」の活動で、山登りやキャンプ、冬の遊びを楽しむ。職員と一緒に子ども達の為に、協力して行っていく中で、父親の子育てへの参加を図る。また、「卒園生事業」での取り組みで、山登りなどのイベントを行い、卒園児や保護者との交流を図る。 今年度も、夏祭り、親子その祭り、保育参観保護者同士の親睦を深める。また、園長が話す「こどものそのの保育について」の合同クラス会や、外部講師を呼んで、「絵本の講演会」を行う事で、保護者の子育てのサポートを行う。

以上の通り報告します。

令和5年（2023年）3月31日
 子どものその幼保連携型認定こども園
 園長 山下 勝